アイロニー表現とエコー発話*

座間　直樹

はじめに

ことばというものが，我々の普段の生活の中で，物事をより効率的に，円滑にさせているのはいうまでもない。自らの思考や信念を相手に伝える時，我々は最も効果的な手段としてことばを使い，ことばを理解することで相手の考えを掌握するのである。また，ことばは，それを巧みに使うことにより，より効果的に自らが伝えたいことを伝えることができる。レトリックと呼ばれる表現は，自分の伝えたいことを巧く包み隠したり，何かと比類させて，効果的に伝えるものである。あるいは，わざと誇張してみたり，言い換えるなど，敢えて突飛な表現を用いることで絶大な効果を得ることができるのである。本稿は，伝統的にレトリックな表現の一つであるとされるアイロニー表現を取り上げ，アイロニー話者が伝えようとしていることが何であるか，またどのようにして聞き手はそれをアイロニーとして解釈するのか，言い換えればアイロニーたらしめているものが何であるかを，人間のマインドリーディング能力の働きを解明しようとする認知語用論を拠りどころとし，究明するものである。さらには，発話解釈を認知的視点で捉える語用論理論である，関連性理論の枠組みで，アイロニー発話を分析しようとするものである。

第 1 章は，従来，アイロニー発話がどのように捉えられていたかを概説する。伝統的なアイロニー分析に加え，コミュニケーションは，あくまで人間の意図的な行動であり，それに携わる人との間の協調的行為であるとする Grice の考えを概観する。その中で，Grice のコミュニケーション理論で，アイロニーがどのように分析されるのかについて批判的に考察し，その問題点を提示する。第 2 章では，本論の拠って立っている理論的基盤である関連性理論の外形を概説する。第 3 章は，関連性理論がアイロニーをメタ表示として捉えることを紹介し，アイロニーは「ある発話や考えを引用して，その内容に対する話し手の批判的，嘲笑的態度を暗示する」表現法であることを示す。第 4 章では，関連性理論の枠組みで，実際のアイロニー発話を分析していく。その際，アイロニーの暗示性，効果，非対称性について触れることにする。

第 1 章　伝統的分析，及び Grice の語用論的枠組み

フォンタニエの古典的なアイロニーの定義をまず掲げると，アイロニーは，「陽気な，あるいは深刻なからかいによって，自分が思っていること，あるいは人に思わせようと欲していることの反対を述べることである」とされている（『レトリック辞典』）。また，手近にある辞書を引いてみると，次のような定義が載っている（下線は筆者による）。

irony　the use of words that are <u>the opposite of what you really mean</u>, …

(*Longman Dictionary of Contemporary English*, 3rd ed.)

反語[1]　本来の意味とは<u>反対の意味</u>を含ませる表現 … つまらない時に「うん，面白いね」と皮肉な口調で言うような場合も含む。

（『岩波国語辞典』第四版）

このように，アイロニーが「あることばを用いて，それとは逆の意味を表すもの」として広く受け入れられているのは，古典的，伝統的な見解を表

しているからだといえるだろう。これらの定義によると，(1) が土砂降りの雨の中で発せられたとするならば，(1) は，その意味である「今日はピクニックにはすばらしい日である」と全く反対の，(2)「今日はピクニックにはひどい日である」ということを伝えるということになる。

(1)　（土砂降りの中で）It is a lovely day for a picnic today.
(2)　It is an awful day for a picnic today.（(1) の字義通りの意味と反対）

また，アイロニーは修辞学で，「文彩的な意味 (figurative meaning)」をもつものとして分類される。つまりアイロニーは，文彩すなわち演説の飾り，自然で普通なそれとは異なる話し方の一つであり，詩人や作家など，ある特定の人のみが使用することのできる言語表現であるとしているのである。言い換えれば，修辞的，文彩的な表現というのは，日常の会話において特別な表現として扱われてきた。また，その文彩的な意味は伝統的分析と同様，文字通りの意味と反対であるとしている。

伝統的分析に対し，ことばによるコミュニケーションを成立させるために，「推意 (implicature)」[2]という概念を導入することによって語用論に革命的な貢献をした Grice は，アイロニーも語用論の枠組みで説明しようとした。すなわち，アイロニーは文彩的な意味をもつものではなく，「会話の含意 (conversational implicature)」を伝えるものであるとしたのである。また，Grice は四つの公理[3]と，その基にある，会話参与者が心得ていなければならない原則となる一般原則，協調の原則 (Cooperative Principle) を規定している。例えば，(3a) によって話し手が伝達しようとした意味は (3b) であるが，それを (3a) の「含意」とみなしたのである。

(3)　a.（John に不親切な行為をされて）John is kind to me.
　　b. John is not kind to me.

Grice によれば，この種の発話の表す命題は「質の公理」に表面的に違反

しているケースである。すなわち，(3a) の含意が (3b) であるならば，(3a) を発するということは，それとは全く逆の (3a) の否定命題である (3b) を伝えることを意図しているので話し手は嘘を言っていることになる。つまり (3a) の話し手は，「自分が偽と思っていること」を口にしているので，「質の公理」を違反した例だといえる。Grice はこのような公理に違反した発話，「文字通り」の命題内容を伝達しようと意図していない発話が数多く存在することに焦点を当てた。故意に公理に従わないのは，それによって，伝達目的を達成できるからである。(3a) はアイロニーであるが，このような発話はまさにこのケースに当てはまる。Grice はそのような用法を公理の「故意の違反 (flouting)」と呼んでいる。それらが多くの伝統的な「文彩」を生み出す源になっていると Grice は考えた。これらの推論は，人々が協調的であるという仮定が，思いのほか頑丈であるというところに根ざしている。話し手がある公理に明らかに違反しているケースであっても，その話し手は聞き手に広く推論を働かせて，一定の意味をくみ取るよう強力に働きかけることができるのである。それによって，もし話し手がそういう意味を伝えようとしていると考えられるなら，少なくともすべてを覆う協調の原則は維持されているということになるのである。

では，(3) のアイロニーを始めとした修辞的な表現を Grice がどう説明するか考えてみよう。

(3)　a. (John に不親切な行為をされて) John is kind to me.
　　b. John is not kind to me.
(4)　a. He is a lion in battle.
　　b. He is like a lion in battle.

Grice によれば，(3a)，(4a) のようなアイロニー，メタファーはいずれも，質の公理と関係の公理に表面的に，また意図的に誰にもそれとわかるやり方で違反しているケースである。話し手が「言っている内容」を信じているとは明らかに思えないからである。そこで，聞き手は，話し手が協調の

原則及び公理に違反していない別の命題Qを探す。Qはアイロニーの場合，実際に発話された命題Pの否定命題であり（つまり(3b)であり），メタファーの場合はPとの比較を表す命題(4b)である。つまり，Griceの説明によれば，アイロニー表現を使用する話し手が意図することは，「言われたこと」(what is said)のレベルで伝える命題，文字通りの解釈を捨て去り，別の他の何かを含意として伝えようとしているということである。同じことが(4)のメタファーや，緩叙法，誇張法に当てはまると考えられる。言い換えると，Griceはアイロニーは「文字通りの意味を捨て」，「会話の含意」として伝統的な意味論と同様「文字通りの意味と反対」を伝えるとした。「推意」がコミュニケーションには必要であるという，Griceの「意味論」から「語用論」へのシフトは大きな功績に値するが，結局は「文字通りの反対の意味」を伝えるという伝統的な意味論と同じ結論に達しているといえよう。

伝統的な分析，およびGriceの語用論によるアイロニーのいわゆる修辞的表現の分析は多くの疑問，問題点を残している。第一に，アイロニーは必ずしも「文字通りの反対の意味」を伝えるものではないということである。(3a)のように，もちろん「文字通りの意味の反対」を伝えるものも多々存在するが，例えば(5)のような例がある。

(5)　He is another Einstein.

(5)はいつもドジばかりしている人を話題にして発せられたものと仮定するが，この発話は文字通りの反対の意味「彼はアインシュタインではない」ということを伝えようとしていないことは明らかである。(5)の表出命題は「彼はアインシュタインである」だが，表意としてこの命題を伝えようとしているわけではない。文字通りの意味を伝えようとしたものではないが，しかし文字通りの意味は決して捨て去られてはいないと見るべきであろう。その証拠として，(5)の代わりに“He is a fool”と直接に言った場合には見られない効果が，そこにはある。

第二に，修辞学に対する上のGrice流の説明では，アイロニーは「文字通

りの意味を捨て」,「会話の含意」を伝えるとしたが，文字通りの意味を捨てるのならば，なぜ (5) のようにドジばかりしている人に対し，わざわざ処理労力のかかるアイロニーという遠まわしの表現を使っているのかという疑問が生じる。関連性理論では，この発話の言語形式から推論できる一次的な表意は，全くの「空」(null) であると考えるが，決して文字通りの意味を捨てるという意味ではない。(5) において「彼はまぬけである」ということを伝えるときに，アインシュタインというとてつもなく天才であるとされる人物と比較することによって生まれる嘲笑的な態度も伝わるわけで，文字通りの意味を完全に捨て去っているわけではない。関連性理論が説明するのは，文字通りの意味から復元される表出命題に対しての態度,「そんなことを思っている人がいたらおかしい，お笑い種だ」という批判的であったり，嘲笑的な態度を高次表意 (higer-level-explicature)[4] として伝えるということである。

第三の問題点は，アイロニーは，Grice の質の公理を，表面的，つまり「言われたこと」のレベルではなく，正真正銘破っているということである。つまり，アイロニーの会話の含意は，Grice の公理が破られていることを，聞き手が確認して生じるのであって，話し手が偽と信じることを言ったという事実は消されていないのである。だからといって，Grice の公理に違反した発話をすれば，必ず会話の含意が生じるわけでもない。

また，最後に問題点として挙げられるのは一体どのようにして，どのようなプロセスを通って，伝統的分析のいう「文彩的な意味」，または Grice のいう「会話の含意」が生まれるかということである。なぜ人は (3) や (5) に見られるような非直接的表現をあえてするのか。この答えは，Grice の理論からは出てこない。アイロニーを始めとした文彩的表現を発話の原則から逸脱した例外的表現と見なす Grice の見解は伝統的分析同様，とうてい支持し得ないといわざるを得ない（Grice 理論に対する批判は Wilson and Sperber 1981 に詳しい)。このような問題点を補うべく，第 4 章では関連性理論の枠組みでのアイロニーの分析を行う。その前に，第 2 章では関連性理論の概念を，第 3 章ではその中でアイロニー分析に関わる概念を詳

述する。

第２章　関連性理論の枠組み[5)]

関連性理論とは，Dan Sperber & Deirdre Wilson (1986 / 95) によって提唱されたコミュニケーションと発話解釈に関する語用論モデルである。この理論は，言語能力と非言語能力とは，認知のメカニズムにおいて明確に区別されるとする「心のモジュール観」を基盤とし，発話の語用論的解釈は，聞き手の心的表示に対して操作された演繹的推論メカニズムであり，その操作は「関連性の原理」と呼ばれる単一原理によって支配されていると考えるものである。

2 - 1 関連性の概念

人間は多様な現象を対等に扱わず，ある特定の現象に他の現象よりも注意を多く払う傾向がある。さらに，人間は現象を処理する時，あらゆるコンテクストを参照するのでなく，特定のコンテクストを選択し，その中で処理しようとする。関連性理論は，人間のこういった選択を可能にする時に必要となる概念を「関連性 (relevance)」にあるとし，次の原理を仮定する。

(6)　関連性の認知原理（第１原理）(cognitive principle of relevance)
人間の認知系は，自分にとって関連ある情報に注意を払うようにデザインされている。(Human cognition tends to be geared to the maximization of relevance.)　(Sperber & Wilson 1995, 262)

当該の情報が「関連ある (relevant)」，つまり関連性を有するとはどういうことか。次の三つの場合を区別する（Blakemore 1992 参照）[6)]。

(7)　a. 既成の想定と結び付き文脈的含意をもたらす場合
　　b. 既成の想定を強化する場合
　　c. 既成の想定と矛盾し，これを削除する場合

今，ある人が朝起きて窓を開けたところ，(8) の事実に気づいたとしよう。

(8)　今日は台風である。

もしその人が昨晩寝る前にベッドの中で，(9) のように考えていたとしよう。すると，(9) というコンテクスト情報と新情報 (8) から (10) を演繹できる。

(9)　もし明日台風が来ていれば，飛行機は飛ばないだろう。
(10)　飛行機は飛ばない。

(8) から導出される結論として解釈される (10) は (7a) の定義に当てはまるもので，(8) の文脈的含意であるといえる。この場合，(8) は (9) というコンテクストにおいて関連ある情報である，ということになる。

また，その人が朝起きて窓を開け，(8)「今日は台風であろう」と考えていたとする。そこで，テレビをつけ台風情報を見たところ，やはり今日は一日中台風であるとキャスターが言っていたとすると，自らの考えを，テレビという客観的な，信頼できるメディアによって確認できたといえる。つまり，そのキャスターの言ったことは，(8) の既成の想定を強化するものであり，従って関連性を有する情報である。よって (7b) の定義に相当するものと考えられる。(7c) のケースは次のような場合である。その人が，ベッドの中で目を覚まして周りの静けさから「今日はいい天気だ」と考えたとしよう。すると，起きあがってテレビから得た (8) という新情報は，既成の想定と矛盾し，(8) は既成の想定を退けるほど言質の強さがあり，その意味で関連ある情報ということになる。このように，新情報と既存の想定との相互作用には三つのタイプが区別され，その人の認知環境に改善をもたら

すことになる。これを認知効果 (cognitive effect) と呼ぶ。

しかしながら，必ずしも新情報が，認知効果をもたらすいかなるコンテクストにおいても，より高い関連性を生むわけではない。例えば，昨晩寝る前に (9) のように考えていた人が起きた時，窓を開け (11) に気づいたとしよう。

(11) 今日は台風であり，今外では子どもたちが遊んでいる。

この場合，(9) という既成の想定を仮定する限り，新情報 (11) は，情報 (8) と同様，(10) の文脈含意を導出し関連ある情報ということになる。しかし，情報 (8) と情報 (11) を比較した場合，(8) の方がより関連性が高いことは明らかである。それは，(11) よりも (8) の方が，より簡潔な情報であるため，発話処理にかかる労力 (processing effort) が少なくてすむからである。つまり，「関連性」は相対的概念であって，関連性には度合いがあり，(12) のように規定できるのである。

(12) 認知効果が多いほど，関連性は高まる。また，そのような認知効果を生みだすために要求される処理労力が少ないほど，関連性は高まる。

人間の認知が関連性を目指しているということは，人間の認知体系は，認知上の処理労力を少なくし，より多くの認知効果を得るようにデザインされているということを意味する。

2-2 最適関連性

関連性理論における最も基本的な想定は，「人間は，情報処理に当たって最大の関連性 (maximal relevance) を目指す」，「しかし処理労力はできるだけ節約したい」，つまり「最小の処理労力で，できるだけ多くの認知効果を

得ることを目的とする」というものである。関連性の認知原理（第 1 原理）(6) が示唆しているように，話し手が聞き手とコミュニケーションするということは，話し手は聞き手に情報を提供しようとすることである (informative intention / 情報意図)。話し手が聞き手に何か情報を提供する時，その情報は聞き手にとって注意を引くに値する情報，関連性を有する情報であることを，一方聞き手側は期待するはずである。聞き手は，発話が関連性をもつはずだと想定する時はじめて，その発話に注意を払い，解釈しようとする。聞き手が発話を理解し，解釈するには何らかの努力を払わなければならないが，その発話が全く関連性のない情報であるならば，そのような努力は無駄になってしまう。一方，話し手は，聞き手の注意を引くつもりで発話している以上，話し手の能力と興味を両立する範囲で，できる限り関連性の高いものを伝達することを目指すはずである (communicative intention / 伝達意図)。コミュニケーションについて当てはまるこの基準は，Sperber & Wilson によって，「最適の関連性 (optimal relevance) の基準」といわれ，(13) のように規定される。

(13) a. 明示的な刺激（発話）は，聞き手がそれを処理するための努力を払うに値する程度に十分な関連性を有する。(The ostensive stimulus is relevant enough for it to be worth the addressee's effort to process it.)　(Sperber & Wilson 1995, 270)

b. 明示的な刺激（発話）は，話し手の能力と興味とを両立する範囲内で，最も高い関連性を有する。(The ostensive stimulus is the most relevant one compatible with the communicator's abilities and preferences.)　(Sperber & Wilson 1995, 270)

(13a) がいうことは，聞き手は，発話を処理する際，少ない労力で聞き手の注意を引くに値する十分な認知効果を得ようとする，ということである。また，(13b) は，話し手が可能な限り努力したとすれば，同じ認知効果をよ

り経済的な仕方で達成できるような他の発話は存在しない，ということをいっている。この「最適関連性」の概念を用いて，関連性の第 2 原理が規定できる。

(14) **関連性の伝達原理（第 2 原理）**(communicative principle of relevance)
全ての意図明示的伝達行為は，その行為が最適の関連性をもつ旨を自動的に伝えている。(Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance.)
(Sperber & Wilson 1995, 271)

(14) のいわんとしているのは，話し手の伝達意図が明示的である場合，話し手は「話し手の発話から聞き手が正当化されない処理労力を負うことなく十分な認知効果を導出することができるだろう」という信念を伝えている，ということである。(6) は人間の認知一般に当てはまる原則であるが，一方 (14) は発話解釈を律している原則である。

しかしながら，注意すべきは，このような最大の関連性という概念は全てのコミュニケーションの場面に当てはまるものでないということである。第一に，話し手は，聞き手にとって最大の関連性のある情報を有していないかもしれない。また，第二に，仮に，話し手が聞き手にとって最大の関連性のある情報を有していたとしても，何らかの理由でそれを聞き手に提供するわけにはいかないケースも珍しくない。例えば，話し手は，聞き手に対して社会的もしくは個人的な理由で，聞き手に伝えたくないと考えていることも十分に考えられるのである。このような場合，聞き手は認知効果の点で最大に関連性のある情報を期待することはできない。また，聞き手は処理労力の点でも最大の関連性のある情報を得るとは限らない。話し手が聞き手にとって最も処理労力のかからない発話をするにはある種の技能が必要であるが，その技能をもっていたとしても，状況によってその時急いでいたり，疲れていたりしていたらその種の技能は十分に発揮されないこともあろう。このように，認知効果の点でも，処理労力の点において

も，発話が必ず最大の関連性を有するという保証はない。しかし，話し手が聞き手に何らかの情報を与えようとすることは，話し手の能力と興味の範囲内で，できるだけ関連性の高いものを目指すはずである。すなわち最適の関連性を目指すということである。

2 - 3 表意と推意

聞き手は，上で述べてきた関連性の原理を基に，話し手の発話を解釈することによって，「表意」(explicature) と「推意」(implicature) という二種類の意味を受け取る。Sperber & Wilson は，表意を定義するにあたり，話し手の明示性 (explitness) について次のように述べている。

(15) 明示性 (explitness)
発話 U によって伝達される想定は，もしそれが U によって符号化されている論理形式を発展させたものであれば，そしてその場合に限り，明示的である。(An assumption communicated by an utterance U is explicit if and only if it is a development of a logical form encoded by U.)
(Sperber & Wilson 1995, 182)

そして，明示的に伝達された想定を表意と呼ぶ。つまり，表意は，発話で用いられた文の意味表示（論理形式）を展開し，推論を用いて，それに肉付けした結果である。一方，非明示的に伝達された想定を推意と呼ぶ。これは，純粋に推論のみによって得られる想定である。

2 - 3 - 1 表出命題の復元

表意の基本となるのは，発話の表出命題 (proposition expressed by the utterance) である。表出命題と表意は，大きな視点から考えると等しいものと考えられるが，表出命題と表意は，必ずしも一致するものではない。す

なわち，表出命題とは発話の論理形式から復元される，文字通り発話によって表出された命題である。一方，表意とは明示的に伝達しようとした話し手の意味を指すものであり，聞き手に伝達された表出命題が表意となるのである。アイロニーは，1章で触れたように文字通りの意味を伝える発話ではない。よって，論理形式から得られる表出命題は存在するが，表意は存在しない。なぜなら，話し手が意図したもの，及び聞き手が解釈する命題は明らかに表出命題とは異なるものであり，表出命題がそのまま聞き手に伝達されるとはいえないからである。

表意の獲得，つまり表出命題の復元は，コンテクスト情報と語用論的推論をもとに富化(enrichment) することで導出されるものである。(16) の発話を基に考察してみよう。

(16) Jane: What did Mary say ?
Peter: I got the letter.

(16) での Peter の発話は多義である。この場合，これを Mary の引用と取るか，または Peter 自身の考えの表明と取るかは聞き手の判断に委ねられることとなる。言語形式のもつ意味と話し手の意図した意味内容とはかけ離れているものである (Wilson & Sperber 1993)。そのような「不確定性 (underdeterminacy)」は，聞き手の解釈においてつきものであり，聞き手は，(14) の関連性の伝達原理を基にこの不確定性を除去し，(17) の過程を経て表出命題を得るのである（詳しくは Carston 2002, 武内 2002 を参照)。

(17) 表意への道
a. 一義化 (disambiguation)
b. 意味充足 (saturation)
c. 自由富化 (free enrichment)
d. アドホック概念構築 (ad hoc concept construction)[7]

(16) は，Jane が，Mary に手紙を送り，Mary のクラスメイトである Peter に対して質問したと考えると，「Mary が何と言ったか」という問いに対して答えた Peter の発話というのは，Mary 自身が言ったことだと考えることが，聞き手にとって最も処理労力が少なく，従って関連性が高いといえる。一義化とは，このように曖昧性を除去することである。意味充足には，二つの側面がある。一つは指示付与であり，もう一つは省略されている要素の復元である。(16) の "I got the letter" は，代名詞 "I" の指示対象を同定する必要がある。また，"I got the letter" を Mary が言ったこととするならば，当然省略された "Mary said" が復元されるであろうし，"the letter" が，Jane が Mary に送ったものであることも復元されるであろう。しかし，このコンテクストにおいて，聞き手が必要としていない情報（例えば Mary の出身地や生年月日など）が復元されることはない。つまり，表出命題の復元というのは，聞き手にとって真偽が問えるレベルまで行われるものであり，コンテクストにおいて関連性を有しない情報が呼び出されることはないのである。かくして，(16) の Peter の発話というのは，以上のような過程を経て，表意として (18) のように聞き手に解釈されるのである（[ ] 内が復元された要素である）。

(18)　[Mary said at t_0][Mary] got the letter [at t_1] [Jane had sent [at t_2]].

2 - 3 - 3 高次表意

表意とは，言語形式を下敷きにして獲得されるものであるが，表意にはタイプの異なるもうひとつの表意がある。表出命題に対する心的態度を表す，高次表意 (higher-level-explicature) と呼ぶものである。(19) のやりとりを考えよう。

(19)　A：昨日の君のコンサート，お客さんたくさん集まった？

B：いや，全然集まらなかったんだ。

(19) は，B の開いたコンサートを話題にして交わされたやりとりであるとすると，(19) の B の発話の表出命題は (20) である。

(20) ［B のコンサートにはお客が］全然集まらなかった。
(21) 今度の B のコンサートには A にもぜひ来てもらいたい。

しかし，B の発話に関する解釈というのは，(20) のような表出命題を復元するだけではない。推意として，例えば (21) のようなことが伝わるかもしれない。さらに，(22) のような，表出命題に対する心的態度が同時に解釈されるのは自然であろう。

(22) B は，B のコンサートにお客が集まらなかったことを残念に思っている。

(20)，(22) は，いずれも (19) の B の言語形式を基に，肉付けされた結果であると考えられるので表意である。前者が，表出命題の復元により得た一次的な表意とすると，後者は表出命題に対する心的態度を表明する高次表意であり，命題構築に関わるものではない。聞き手は，話し手の態度を表す明示的な言語形式[8]や，非言語的な声の調子や，顔の表情からこれらの高次表意を復元するわけである。話し手の心的態度というのは，賛成的，賞賛的，否認的，批判的など多岐に渡るが，アイロニーは，表出命題に対して，批判的，嘲笑的態度を高次表意として伝える発話である。テストで悪い点数を取った生徒に対して「よくがんばったな」と先生が言ったとしたら，それは「(その生徒はテストで) よくがんばった」という表出命題に対して，批判的あるいは，嘲笑的態度を伝えているのである。また，アイロニーが高次表意を伝える発話であるなら，声の調子，顔の表情など非言語的な情報が，アイロニーに密接に関わっていることは当然のことである。

次章では，高次表意を含む発話の中の一つであり，アイロニー表現が直接的に関わる，引用した命題に対して心的態度を表す「エコー発話 (echoic)」について触れる。さらに4章では実際のアイロニー発話を用い，アイロニーがエコー発話であることを実証する。

第3章　メタ表示と関連性

3-1 メタ表示と記述的用法

1章で触れたように，アイロニーや比喩法などは伝統的に，文彩的な「ことばのあや」に過ぎない，特殊な表現であると考えられていた。伝達を目的とした発話の中では，逸脱したものだと考えられていた。一方で，一般的に伝達に用いられる発話は，主として「話し手が真だとする出来事，状況，考えなどを記述し，正確に，文字通りに行われる」ものだと信じられていた。つまり発話のほとんどは物事をありのままに記述しているものと考えられていたのである。これと対照的に，関連性理論は，発話とは，誰かが真だと信じていることを，さまざまな類似性 (resemblance) をもって表示したものであるという考えに基礎を置いている。

発話は表示である。しかし表示対象は，常に客観的状況や話し手自身の考えとは限らない。聞き手を含む他人の発話や考え，あるいは他人の考えていそうなことも表示対象として含まれる。関連性理論は前者を「記述的用法 (descriptive)」，後者を「解釈的 (interpretative)」ないし，「メタ表示的用法」と呼んで，区別している。(23) ～ (26) を見てみよう。

(23) テーブルの上にケーキが置いてある。

(24) テーブルの上のケーキは妹の分だ（と思う）。

(25) <u>一郎（自分）は</u>＜テーブルの上のケーキは妹の分でない＞<u>と信じている</u>。

(26) <u>一郎は</u>＜<u>妹が</u>＜テーブルの上のケーキは妹の分でない＞<u>と思って</u>

いる＞と信じている。

(23) は，出来事をありのまま，つまり「記述的」に表示したものである。この発話は，話し手が真だと思うことに表示を与えたものであるが，話し手自身の信念や考えの表明ではない。(24) も話し手が真だと信じている事象に表示を与えているものであるが，特に話し手自身が有する意見を表している。(23) や (24) のように，自らが真だと信じる事象に記述的に表示を与えるのを記述的用法という。(25)，(26) は話し手が，自分とは違う考えをもつものが存在することを認知し，自らのものでない第三者の考えや思考を「解釈」したものである。他人の考えに表示を与えることをメタ表示という。

メタ表示は，他人の考えや意見に帰属する (attribute) ことのできる能力によってその表示が大きく制限される。他人に帰属する能力が未成熟で，例えば (24) を信じている子どもは，(25) や (26) のような自分が信じている事象が真でない表示を含む表示はできないと考えられている。(25) は，一次的に人の考えや意見を表示したものである。つまり，(25) の話し手は，自分の考えや意見と異なる他人のそれを表示しており，一方 (26) は，自分の意見とは異なる他人の考えについての第三者の意見を表示している。このようにメタ表示能力は人の意見や考えに帰属することで無限に表示を与えられるものだと考えられる。

便宜上，ここでは「記述」と「解釈」とに発話を分けて考えているが，人の考えや意見，思考に表示を与える場合，自らの考えを全く織り込まずに行うことは，実際ほぼ不可能である。話し手の考えが多少なりとも加味されてしまうと考えるほうが現実的であろう。また，どれほど正確に，記述的に表示を与えたとしても頭の中の思考を表示する限り，表示されたものは思考の正確な記述とはいい難い面もある。つまり，自分の思考を表示するときも言語形式に乗せたものが「正確に」，記述的に話し手の思考を表示しているとは「正確に」はいえないであろう。よって，「記述的用法」というのも，大きい視点から見ると全て「解釈的用法」だといえる (Sperber

& Wilson 1995, 232)。

3 - 2 思考の帰属

これまで触れてきたように，メタ表示とは話し手の思考や信念を伝えるものでなく，他人の発話や，信念を伝えるものである[9]。アイロニー発話は，他人の発話や信念を直接伝えるものではないが，他人の発話や思考を引用し，それに対する話し手の態度を伝えるものである。その引用した個所のオリジナルとしての低次表示は，三つの種類が区別される (Sperber 2000)。

(27) 低次表示の三つの種類
　a. 抽象的表示（文，命題）
　b. 伝達的表示（発話）
　c. 心的表示　（思考）

これら三つの表示に関わる引用は，オリジナルのものと同一の表示を与えているのではなく，類似性をもったものに表示を与えていると主張したい。その際，引用個所がオリジナルのものと，どの程度類似性をもっているか，また聞き手がどのように引用の存在を認知するのかについて考察していく。またここであげた三つの低示表示への話し手の帰属性に注目し，その関係を探る。(28) と (29) を比べてみよう。

(28) “William” is a common name.
(29) “William” is my cousin.

(28)，(29) では，共に “William” という人の名前が引用されているが，(28) がその語のもつ意味に帰属していないものである。(29) での “William” の引用の仕方は，“William” という人物が存在することを前提とし，その人柄や背格好など，その人物の特徴全てを包んだ表示が与えられているものであ

る。(29) は記述的用法である。一方で，(28) の引用は，“William” という抽象的な人の名前を言及したもので，実在する特定の “William” を指しているわけではない。前者は，特定の人物を示しているので，その単語に帰属して表示を与えられたといえるが，後者は，抽象的なレベルで表示を与えられているので，その単語の意味には帰属していない。
この他に文や句も引用されることがある。

(30) “Kick the bucket” has three words.
(31) “Shut up” is rude. (Wilson 2000)
(32) “So many men, so many minds” is a sentence of English.

(30) ～ (32) は，文や句，または諺を引用したものであるが，これらも全て引用箇所のもつ意味に帰属していない。(32) のような諺を含む表示であっても，“So many men, so many minds”，「十人十色」のもつ「人の好むところ，思うところ，なりふりなどが，一人一人みんなちがうこと」という意味には帰属しないで引用されている。(31) で言及されているのは，引用部分である “Shut up” の言語的特徴（命令文であることや，shut は四つの綴り字からなる）ではなく，「黙れ」という意味内容である。

3-3 エコー発話

3-2 では引用した個所に帰属しないものを取りあげた。それに対し，話し手もしくは第三者に帰属した発話や思考に表示を与えるものに「話法 (reported speech)」と「エコー発話 (echoic)」がある。
話法は，聞き手に「何某が何かを言ったとか，考えている」とかいう事実だけを知らせるものである。それに対し，「このような解釈は聞き手に，話し手は何某が言ったことを思い浮かべており，それに対してある態度を抱いている」ということを伝えるものを関連性理論では「エコー発話」という。これは言語哲学における「使用」(use) と「言及」(mention)[10]の「言及」

にあたる。

エコー発話は，間接話法の「言及」に属するものである。また，エコー発話では，「このような解釈は聞き手に，話し手は何某が言ったことを思い浮かべており，それに対してある態度を抱いている」という事実を知らせる。このように解釈自体が関わってくる，言い換えれば誰かの発話に対して向けられた態度が発話の認知効果として不可欠であるものがエコー発話である。(33)，(34) の例を見てみよう。

(33) a. Peter: Ah, the old songs are still the best.
　　b. Mary (fondly): Still the best.
(34) a. Peter: Ah, the old songs are still the best.
　　b. Mary (contemptuously): Still the best !　　(Wilson & Sperber 1992)

(33b)，(34b) はいずれもエコー発話である。どちらも Peter の発話から同じ箇所を引用しているが，この二つの発話はエコーした発話への態度が異なっている。(33b) において，Mary は自らがエコーしている考えや意見に「賛成」しており，Peter の意見にも肯定的である。つまり「昔ながらの曲が今でも最高である」と思っている。一方，(34b) では，Mary のエコーした意見に対する態度は否定的である。彼女はエコーした意見や考えと自らを切り離し，嘲笑や軽蔑の態度を表している。「昔ながらの曲が今でも最高である」なんて考える人がいたらおかしい，などといった批判的な態度を込めることで，自分と Peter の考えが異なることを伝えているのである。これはアイロニー発話である。

エコー発話は，必ずしも (33)，(34) のように聞き手や話し手の考えや意見に帰属するわけではない。その帰属先は，第三者であったり，ある特定の人であったり，もしくは特定できない一般の人の思考，格言などである可能性もある。エコーの対象となる考えに対する態度は，コンテクストによって多岐にわたるし，時には話し手の態度は非明示的にも表されることも明示的に示されることもある。アイロニー発話は，態度を意図的に非明示

的に表明するものであり，エコーしたものから自らを切り離す態度を含む表現である。

以上考察してきたように，アイロニー発話は人の考えや意見に帰属し，自らの意見を伝える解釈的用法の一つである。伝統的な分析では，アイロニーやメタファーのような修辞的発話は字義どおりの意味とは別に，修辞的な意味をもつとされ，すべて一緒くたにされてきた。しかし，アイロニーは人の考えや意見を間接的に引用することで，いわば二次的に，メタ表示として，自らの表出命題を伝えるのに対し，メタファーは表意のレベルで処理されるものである。つまり，アイロニーを発話する話し手は，人の考えや意見を，「間接話法」を用いて，「使用」するのではなく，「言及」しているのである。アイロニーは，その発話の推意を，他人の考えに帰属することで顕在化するものである。その際，重要となるのが話し手の態度である。誰かの発話や信念に帰属し，それと自らを切り離すという態度をアイロニーは伝える。この態度が，メタ表示として聞き手の解釈に加えられるのである。また，その態度が非明示的に伝達されることが特徴である。誰かの発話や考えを引用し，それに対して態度を含む発話をエコー発話というが，この発話には，自分以外の考えを認知し，それを表すメタ表示能力が必要である。聞き手にその能力が備わっていなければアイロニーはアイロニーとして解釈されることはなく，故に，まだ自らが真だと信じることにしか表示を与えられない子どもにはアイロニー発話を解釈するのは困難だといえる（Gibbs 1994 参照）[11]。

第４章　エコー発話としてのアイロニー

３章において，アイロニーはメタ表示であり，ある人の考えや意見に帰属して発話をエコーし，その発話に対して自らを切り離す態度を表す言語表現だと述べた。本章では，実際のアイロニー発話をとりあげて，そのことを検証していく。

4 - 1 表出命題と表意

典型的なアイロニーの例として (35) を見てみよう。

(35) John: It is a lovely day for a picnic today.
(They go for a picnic and it rains)
Mary: It is a lovely day for a picnic indeed.

伝統的な分析では，アイロニーは文字通りの意味の反対を伝えるものであるとした。つまり，(35) の Mary の発話は，その意味である「今日は絶好のピクニック日和ね」の反対の意味「今日はピクニックには最悪の日だね」が伝わるとしたのである。Grice も，伝統的な分析同様に会話の含意としてやはり「反対の意味」が伝わるとし，1 章ではそれらに対し批判的見解を述べた。しかし，(35) で Mary が伝えたいことは，確かに文字通りの反対の意味である。Maryは「こんな雨の日がピクニック日和だなんて考える人がいたらお笑い種だ」という気持ちを伝えているのである。これは，まさしく文字通りの反対の意味を伝えているわけで，伝統的分析の定義に当てはまる。

また，3 章で述べたように，アイロニーは解釈的に発せられるものである。例えば，(35) の John の発話は，晴れているときに発せられたと考えると，出来事をありのままに，記述的に表したものだといえる。しかし，天候が悪化し，雨になったときの Mary の発話というのは，Mary が現実に表明した考えの解釈ではない。この発話は，誰か他の人に話し手が帰属させる考えの解釈である。つまり，ここでは，John の先行発話を引用し，その発話に対する解釈を聞き手である John に伝えているのである。言い換えれば，Mary は (36)，(37) のような仮定を伝達しているといえる。

(36) Mary believes that it is not a lovely day for a picnic.

(37) Mary believes that it is ridiculous to think that it is a lovely day for a

picnic.

(36), (37) は，ともに (35) の Mary の発話の言語形式から復元できるものであるので，高次表意である。これらは，表出命題に対する心的態度を表明したものである。上記したように，Mary は，(36) のような文字通りの反対の命題を伝えようとしていることは明らかである。また，(37) は，(35) の John の発話を低次表示として，高次表示の中に埋め込んだものと考えられるだろう。しかし，Mary は John の表示に，明示的に別の表示を与えているわけではない。あくまで，John の発話をオウム返ししているだけである。それにもかかわらず (36) や (37) のような複数の命題態度を伝えうるというのは，アイロニーが認知効果上，経済的な発話であると考えられるからである（4-3 参照）。

反対の意味を伝えないアイロニーとして (5) を再考してみる。

(5)　He is another Einstein.

(5) はいつもドジばかりしている人を話題にして発せられたものと仮定するが，この発話の話し手は，(5) の文字通りの反対の意味を伝えようとしていないことは明らかである。(5) の表出命題は「彼はアインシュタインである」だが，表意としてこの命題を伝えようとしているわけではない。話し手が聞き手に伝えようとした命題は他にあると考えられる。しかし文字通りの意味は決して捨て去られてはいない。つまり，この発話がアイロニーとして聞き手に解釈されるとき，文字通りの意味が全く無視されるわけではない。その証拠として，(5) の代わりに "He is a fool" といった直接的な表現を用いた場合とは明らかに聞き手に与える印象が異なる。関連性理論では，この発話の言語形式から推意できる一次的な表意は，全くの「空」(null) であると考える。しかしながら，(5) の高次表意は存在する。高次表意とはその発話に対する態度を表すものだが，ここでは「彼はアインシュタインである」という命題に対し，「そんなことを思っている人がいたらおかしい，

お笑い種だ」という批判的であったり，嘲笑的な態度が含まれている。つまり，不特定第三者の発話に一度帰属し，それと自らの考えがかけ離れていることを示すために自らをその発話から切り離しているのである。そして，話し手は，聞き手に推意として "He is a fool" という命題を伝えようとしたのである。聞き手にとって，"He is a fool" という直接的な発話を解釈するのと，"He is another Einstein" を上記したような複雑なプロセスを通り，アイロニーとして解釈するのとでは，後者のほうがより困難であろう。故に，アイロニーはアイロニーとして伝わらない可能性を大いに含む発話であるといえるであろう。しかし，複雑な過程を経るからこそ，その効果というのは絶大なものになるのである（4-2，及び 4-3 参照）。また，プロセスのみを追うと，いくつかの段階を経ている分，アイロニー発話の解釈は困難のように感じるが，アイロニーの方が，文字通りの意味を伝える発話よりも解釈が早いという実験結果も出ている (Gibbs, 1994)。これは，アイロニーならではの，一つの発話から呼び出される解釈の「広がり」が大いに貢献しているからであろう。

次にアイロニーがエコーされたものであるということを検証していく。Mary は John に明日返すという約束でお金を貸したが，本当に返してくれるか心配になり Peter に相談したとしよう。その時，Peter が (38) のように答えたとする。

(38) John is an officer and a gentleman.

だが，次の日，John は Mary の信頼を裏切り，お金を返さなかった。Mary は，そのことを Peter に告げ，続けて (39) を発したとする。

(39) An officer and a gentleman, indeed.　(Wilson & Sperber 1992)

この発話は明らかにアイロニーである。しかし，"officer"，「役人」の反対の意味とは何であろうか。"private citizen"，「民間人」であろうか。"not

officer" は，"officer" を否定してはいるが，反対の意味であるとはいい難い。(39) の Mary の発話というのは，前の日に Peter が発した言葉をそのまま再現しつつ，その発話内容に対する批判的態度を示し，それによって自分の発言をアイロニーとして成立させているのである。言い換えるなら，表層的なレベルで発話の文字通りの意味内容を提示し，メタ言語的なレベルでそれに対する批判的態度を意図的に提示する，という重層的伝達によってアイロニーは成立していることが理解されよう。つまり，Mary の発話は，Peter の発話内容を言及するためにエコーし，それに帰属させることで自らの意見と切り離し，否認的態度を伝えているのである。

次に従来のアイロニー分析では到底説明しきれないアイロニーを考えてみよう。

(40) Did you remember to water the garden ?　(Sperber & Wilson 1981)

(40) は，雨の日に発せられたとするものであるが，これは疑問文という高次表意を含むものなので，文字通りの反対の意味を特定することは困難である。(39) では，その帰属先は聞き手でありオリジナルの発話者 Peter であるが，アイロニー発話の帰属先は必ずしも聞き手や話し手である必要性がない。(40) では，先行する発話が特にないとすると，(38) のようなエコーする対象がないので，瀬戸 (1997) のいうように，アイロニーは必ずしもエコー発話ではないのではないかと考えられなくもない。しかしながら，エコーする発話，思考，信念は当該の会話の中で発せられたものである必要は全くなく，特定の，または不特定の第三者の発話であることも多々ある (Sperber & Wilson 1998)。(40) では，「こんな雨の日に，庭に水をやるの忘れたの？ なんて聞く人がいたらバカバカしい」という不特定第三者の発話に対する批判的，嘲笑的態度を表明しているのである。

疑問文の他に，命題に対する高次表意を含むものとして「命じ」，つまり命令文があげられる。(41) を見てみよう。

(41) Ruin the carpet.

(41) は，一度カーペットを汚したことのある者に対して発せられたと仮定するが，これも同様に高次表意を含むものなので，文字通りの反対の意味を考えること自体ナンセンスである。(41) の話し手は，聞き手に対して「(一度カーペットを汚したことのある者に対して)「汚せばいいじゃない」と命じるものがいたらお笑い種だ」といったような批判的な態度を伝えているのである。つまり，(41) の表出命題は (42) だが，高次表意に組み込まれた命題内容に対して批判的な態度を表明しているのである。

(42) The speaker is telling to ruin the carpet.

疑問文や命令文といった高次表意を含む発話の，文字通りの反対の意味を考えることはそれ自体不可能であるが，アイロニー発話を誰かの発話を言及したものとして考えれば，命題だけでなく，高次表意に対する態度を表す表現法と分析できるので，高次表意を含むアイロニー発話があることの説明になるといえる。伝統的な分析では，文字通りの意味だけに焦点を当てているため，これら高次表意を含むアイロニー発話を説明することはできないが，不特定の第三者の発話をエコーし，その発話に帰属し，自らを切り離すという態度を伝えるという関連性理論の考えに当てはめてみれば決して例外的なものではないことが理解されよう。

4-2 アイロニーの暗示性

アイロニーには，それがアイロニーであることが明言されると効果が失われるという性格がある。アイロニーがアイロニーらしい効果をあげるためには，その提示態度が暗示的 (implicit) でなくてはならないということである。その証拠に，metaphorically speaking という表現は存在するが，ironically speaking という表現は存在し得ない。これは，これから話すこと

がアイロニーだと前もって相手に知らせる言語的手段がないことを示している。すでに上で述べたように，表層的なレベルとメタ言語的なレベルの重層的伝達によってアイロニーが成り立っているとすれば，文字通りの意味でなく，それを包み込み，聞き手に明示的に伝わらないよう隠すことがアイロニーの特性だといえる。言い換えれば，暗示的であればあるほど，アイロニーとしての特徴は際立つのである。しかし，当然のことながら，あくまで聞き手にそれがアイロニーだと分かる程度の暗示性でなくてはならない。(43) を見てみよう。

(43)　I think maybe John just might be a little bit of a genius.

(43) は修辞学で「控えめ表現 (understatement)」，もしくは「緩叙法 (litotes)」と呼ばれるものである。この発話は，John を馬鹿にするためのアイロニー発話である。(43) には，"I think" という高次表意が含まれ，かつ "maybe", "might", "a little bit of" などの命題を弱める語が含まれているので，これも伝統的分析のいう文字通りの反対の意味をあげるのは不可能である。また，命題内容を弱める語がいくつも含まれているということは，発話に対する嘲笑的な態度を非明示的に，聞き手に伝わりにくいように表現するアイロニーの特性の顕著な表れだといえる。仮に，(43) の代わりに (44) の発話がされたとしよう。

(44)　I think John is a real genius.

(44) も同様にアイロニーとして聞き手に伝わるが，(43) と比較した場合，(43) の方が，よりアイロニカルに聞こえるであろう。緩叙法とは，表現を敢えて弱めることで，その命題内容を強調するものである。つまり，"a little bit of a genius" という弱めた表現は，たとえば "a real genius" のような，"genius" の語の意味を強調した表現と同等の意味をもつとされる。緩叙法がアイロニーとして伝わるときは，その強調された命題に対する嘲笑的態度

が伝わるのである。

また，(43) は明らかに文字通りでない不正確な発話である。「John はちょっとだけ天才である」の「ちょっとだけ」とはどの程度なのか。また，そもそも John を馬鹿にする為の発話であるのだから，このコンテクストにおいて John が天才であるはずがない。すなわち，事実をそのまま伝達しているのではなく，解釈的に聞き手に伝えているのである。だが，(43) のような表現を使うと，「John が（本当に救いようもないほど）間抜けである」という意味がよりよく伝わる。このことは，命題を弱めることが命題の真偽に関わっているだけでなく，嘲笑的な態度をより増長させているという示唆を与える。つまり，命題内容を弱める語が命題内容に貢献しているだけでなく，((43) では John の馬鹿さ加減が強調されるだけでなく)，命題に対する批判的，嘲笑的態度がよりよく伝わるのである。もし意味論的意味だけを考え，(43) において，“a little bit of genius” が “a real genius” とイコールであるとするならば，(43) と (44) の認知効果は同等であるということになるし，なぜ敢えて“a little bit of ” という表現を使用したのかという説明がつかない。つまり，“a little bit of” という語は，命題内容を強調する為に使用されているのとともに，嘲笑的態度が強く伝わるという認知効果も生んでいるのである。このように見れば，アイロニーと緩叙法という，修辞学ではお互い相容れない「ことばのあや」とされる表現も，共通した，例外的でないものであることが分かる。以下にあげる例も緩叙法である。

(45) You can tell he's upset.　(Wilson & Sperber 1992)

(46) It seems to be raining.　(Wilson & Sperber 1981)

(45) は，ある者が人前で大騒ぎをして醜態をさらしている場面での発話と考えよう。話し手の意図していることは，“upset” で表される程度のことではなかろう。(46) は，(1) 同様，土砂降りの中での発話とすれば，これらも敢えて控えめに表現することで命題を強調し，その強調された命題に対して批判的な態度を聞き手に伝えるものである。言い換えるなら，皮肉的に響かせ

るために敢えて控えめな表現を用いているのである。こう考えると，緩叙法を用いる目的がアイロニカルな響きを与えることであることも分かる。

また，特に日本語では，丁寧表現がアイロニーとして好まれて使われる。「ご大層なお召しものでいらっしゃって」や「おめでたい奴だな」などはその典型である。「ご大層」などはアイロニーとしてしか使われない表現である。これは，特定の意味の強化ではない。嘲笑的な態度を高めるために，現実の状況との落差を高めているのである。丁寧表現とは現実とのギャップを作るために敢えて，英語では "Would you〜?" や "Could you〜?" など過去形を用いるものである。つまり，非現実的な語を用いることで話し手と聞き手の距離を作るのである。暗示的であることも，聞き手との距離を置く結果を生むことになると考えれば，丁寧表現がアイロニカルな響きを生むことも納得ができよう。さすればアイロニーの特性の一つである暗示的であるということは，相手との距離を置くことだともいえるかもしれない。

アイロニーが暗示的であり，その存在を決定的に明言する標識を伴わないのであれば，当の発話がアイロニーであることを聞き手は何を手がかりに，そしてどのように知るのであろうか。(47) の John のアイロニー発話を基にアイロニーの認知を考えてみよう。

(47) Peter: Bob erased your data.
　　John: Oh, I like that.

3章において，表示の仕方には記述的用法とメタ表示が区別されると述べた。(47) の John の発話は，John 自身の思考を表しているものと捉えることも，John の思考を表すためにある表示に別の表示が与えられたとも考えられる。しかし関連性理論に当てはめて考えれば，説明は明快である。仮に John の発話を記述的に表示されたものとしよう。Peter から Bob が John のデータを消したという事実を知り，それに対して John が「そりゃいいや」と言ったとき，聞き手である Peter の頭にはおそらく，自分のデータを消されてさ

ぞかし腹が立っているだろうなということが浮かんでいるだろう。これは呼び出し可能性が極めて高い想定であると考えられる。また，John は，Bob がデータを消してしまったことを喜ぶようなことを言うとは決して想像しないであろう。これは，既存の想定とも結び付かないし，それを強化もしないし，それをはねつけるほどの言質の強さも兼ね備えていないからである。この場面で John の発話を，最適関連性を有するものと解釈する唯一の方法は，発話が解釈的に行われたと考えることである。すなわち，“I like that” は，John 自身の考えでなく，その考えを自らの考えと切り離すために用いられたとすることで John の発話は最小の処理労力で最大の認知効果を生むものである。

印象や態度の伝達は通常の推意の伝達と同様，言語形式で説明できるものである。しかし，話し手は，はっきりとした仮定を聞き手に伝達することを常に意図しているわけではない。つまり，話し手の意図が確定的でなく，聞き手に対していかに解釈するか責任を負わせることもあるのである。(47) で John は，一方では，「「そりゃいいや」と考える人がいたらバカバカしい」という態度を強く伝達しようとし，他方では，その仮定から引き出されるいろいろな効果を弱く推意として伝達する。そうしたことで，データを消してしまったことを喜ぶことがいかに馬鹿げているかを聞き手に決定させる責任を与えているのである。

4-3 アイロニーの効果

次にアイロニーの効果について考えてみよう。前節で触れたように，アイロニーはより暗示的であればあるほど強いインパクトを与えるという性質をもっている。また，4-1 で指摘したように，アイロニーは直接的な，文字通りの表現よりも高い認知効果をもたらすものである。例えば，整理されてない部屋を見て，「汚い部屋だね」と言うより，「綺麗な部屋だね」と言ったほうがより失礼で，より滑稽さが伝わる。しかし，Gibbs (1994) が指摘しているように，実際はアイロニーの方が直接的な表現よりも，相手に

与える心理的ダメージが少ない場合も考えられる。(48) を見てみる。

(48) Your mother is a beautiful woman.

(48) のように，「君のお母さん綺麗だね」と言う場合は，「君のお母さんはひどい顔だ」と言うより，明らかに相手に対して与えるダメージは低い。つまり，アイロニーの向けられた当事者が，その場では表面的に対面 (face) を取り繕うことができることで救われるという効果を生むのである。事象をそのままはっきりと言い切らないこと（つまり暗示的であること）で聞き手のメンツが保たれるのである。言い換えれば，アイロニーが社会的関係を保つ働きをしていると考えられるのである。だが，この効果はアイロニー本来の性質ではない。上であげた「君のお母さんは綺麗だね」というアイロニーでは，実際そのお母さんが綺麗であるか，ひどい顔をしているかは断定できない。人の親の顔をあれこれ言うこと自体が社会的に問題である。つまり，「君のお母さんは綺麗だね」と言った者は，実際に「君のお母さんはひどい顔だ」とは言えない社会的制約からそのような発話をしたのである。そのために話し手はアイロニー表現という曖昧な方法を用い，また同時に「君のお母さんはひどい顔だ，なんてことは言ってないよ」という逃げ道を活用できるのである。すなわち，話し手は，本当は聞き手のお母さんの顔のことをどう思っているのかを明言せず，ぼかしているのである。ということは，この発話で取り上げられた命題の真偽性の判断は聞き手に委ねられるということになる。と同時に，当の発話が正真正銘アイロニーとして伝わっていないことを示すことになる。なぜならこの社会的関係を保つという効果は，アイロニーであることをぼかしたことにより生まれる効果であるため，アイロニーが単なる曖昧表現と何ら変わらないことになってしまうからである。つまり，命題内容の真偽が話し手にも聞き手にも共有されていなければアイロニー発話は単なる曖昧表現にもなりうるということである。対照的に，取り上げる事象が，話し手にも聞き手にもその真偽が明らかである時，アイロニーとして発せられた発話には逃げ

道は存在しないのである。このように社会的関係を保つという効果は，アイロニーの一面ではあるかもしれないが，アイロニー特有の性質ではない。

また，劇的アイロニーなど，話し手が意図しないで (unintentional) 聞き手にアイロニーとして伝わる発話がある。(49) は，ある時期流行っていて，今では時代遅れとされるティラミスを話題にしているが，聞き手である John の大好物がティラミスであることを Mary は知らずに発したものとする。

(49) There are still people who eat "Tira-mi-su." Unbelievable isn't it ?

(Hamamoto 1998)

この発話は，話し手である Mary がアイロニーとして聞き手に解釈されるよう意図して発したものではない。しかし，聞き手の John は，Mary の意図を知らずに自分が馬鹿にされたように感じ，ゆえにこの発話は John にとって皮肉的な響きをもつだろう。伝達という行為は，関連性の原理に従えば，聞き手の認知環境を改善する目的で，何らかの伝達意図を含むものであるとすれば，この発話で Mary が意図したことは，John をあざけ笑うことでなく，あるケーキについての彼女の意見を John に伝えることであり，それ以外のなにものでもない。そのように考えれば，Mary の発話というのは皮肉的であるはずがない。しかし聞き手の John はそれを皮肉的に捉えてしまったのである。2 章で触れたように，聞き手は，話し手が伝達意図をもって発話をしていると期待している。(49) のように話し手の意図に反して，偶発的に (accidental) アイロニーとして解釈されてしまうような発話は，一種の誤解釈として関連性理論は説明する。このような発話は，コンテクストによって，発話者の意図がいかようにも解釈される可能性があるものであるということで，これまで語用論の分野で扱われることはなかった。(49) は，Mary に John に関する先行知識が欠けていたことにより生じた，いわばアクシデントである。関連性理論は，このような誤解釈のケースを，話し手が聞き手が呼び出しうると考えた想定を，聞き手が呼び出せなかった

と説明する。また，John が Mary の意図と異なる，誤った解釈をした過程というのは，およそ，John の頭の中にある「Mary は僕のことを前から嫌っていたようだった」，「彼女はミーハーである」などといった想定と (49) を結び付け，Mary の発話をアイロニカルな発話として解釈するに至ったのかもしれない。言い換えれば，話し手である Mary は，聞き手，John の呼び出し可能性のある想定の算定を間違えたのである。

(48)，(49) が示唆することは，アイロニーは暗示的であるがために，自らの意見を明示的に伝えたくないとき，つまり曖昧にしたいときに利用されたり，またアイロニーとして伝わるよう意図したものが，暗示的であるためうまく伝わらなかったり，逆にその意図に反してアイロニーとして解釈されうる危険性が大いに潜んでいるということである。従って，アイロニーの効果としてあげられるのはせいぜい次のようなことであろう。第一は，(44) が例証するように，「John は天才である」という命題に対する批判的態度を聞き手に伝えるという点である。つまり，アイロニーは，「「John は天才である」と考える人がいたらバカバカしい」といった複文的な否定を伝えるものであり，「John は天才ではない」のような文字通りの意味の単純な否定からは決して得られない効果があるということである。第二に，この複文的な否定が非言語的に，分節化されない形で行われるという点である。「John は天才だ」と言った方が，「John が天才だと考える人がいたらなんて滑稽だろう」などといった言語化，分節化された形よりも，はるかに効率的に，そして効果的に嘲笑的な態度を聞き手に伝えることができる。この解釈における広がりこそが，アイロニーが伝統的に「文彩的」と区分されてきた要因であり，この効果を存分に発揮することで後世にも残るような偉大な文学作品が生まれてきたと考えられるのである。

4-4 非対称性

最後にアイロニーの特性としてあげられるのは，アイロニーの非対称性である。アイロニーが伝える印象は，専らネガティブなものである。例え

ば，土砂降りの日に「いい天気だね」というアイロニーは存在しても，晴れた日に「気分が滅入る天気だね」というアイロニー表現は存在しない。

このことについて，Sperber & Wilson (1981) は，(50a) のようなアイロニーは存在しても，(50b) のようなアイロニーが存在しないことをあげ，次のような説明をしている。

(50) a. That was a great success.
　　 b. That was a failure.

(50a) は，あるイベントを企画し，それがとんだ失敗に終わったとき発せられたとすればアイロニーとなる。しかし，(50b) のようなアイロニーはいかなるコンテクストにおいてもアイロニーにはなりえない。これは，一つの行為の行きつく先としては，成功が期待されるのが人の常だからである。このような期待の根源となるのは，文化的に規定された行動の基準やルールである (Sperber & Wilson 1981, 560)。つまり，成功を目の前にしてそれをあざけ笑うような必要性はまるでないのである。

しかしながら，この説明には次のような誤解を生じる恐れがある。例えば，土砂降りの中での「いい天気だね」という発話は，快晴であることが望ましいという前提で発せられたものである。一方，一年中日照り続きの国では，雨こそが恵みになると期待され，快晴であることは全く歓迎されない。そのような文化で過ごす者が，アイロニーとして「いい天気だね」と発した場合は，「毎日暑い日が続いて，いい加減雨が降らないだろうか」という気持ちを込めたものとなる。つまり，取り上げた事象(ここでは天気について)のよしあしというのは，文化や価値基準によって変わるものであり，決して万国万人共通の倫理や基準が存在して，それに倣って我々がアイロニーを発しているわけではないということである。そうした基準というものは，文化や個人の価値観を含めたコンテクストによって無限に存在するものであり，基準の妥当性というのは問題ではない。Sperber & Wilson のいう基準やルールというのは，ある文化や社会において広く共有されて

いる一般的期待や通念ではなく，それを含みながらも，もっと広くその場の話し手と聞き手の有する想定のセットである。コンテクストというのは，発話直前には有していなかった想定も，さらには発話の後も真であると信じない想定も含まれているのである[12]。晴れ渡る天気を望ましいものとして捉えるのか，はたまた望ましくないものと考えるかは当該のコンテクスト次第なのである。

3章であげた例を思い返してみよう。

(33) a. Peter: Ah, the old songs are still the best.
　　 b. Mary (fondly): Still the best.
(34) a. Peter: Ah, the old songs are still the best.
　　 b. Mary (contemptuously): Still the best !　　(Wilson&Sperber 1992)

(34b) がアイロニーとして成立するのに対して，(33b) がアイロニーとして聞き手に伝わらないのは，アイロニーが批判的態度を伝えるものであるからであるといえよう。言いかえれば，(33b) の発話は肯定的態度を伝えるものであるからアイロニーとして成り立たないのである。つまり，アイロニーは，暗示的に批判的態度を伝えるために，当の発話は表面上肯定的であるということである。アイロニーの (34b) は，(33b) と言語形式上等しい。これこそ，アイロニーの非対称性の証拠となろう。

しかしながら，批判的態度を伝える発話が全てアイロニーになるとは限らない。例えば，あるイベント会社の人間が，ライバルの会社が企画したイベントが失敗すれば自分たちの仕事が増えると考え，失敗を願っていたとしよう。しかし，結果は大成功に終わり，それに対して批判的に「とんだ大失敗だったな」と言ったとしても，それはアイロニーにはならない。むしろ，発話として不適切である。これは，Sperber & Wilson (1981) がいうように，一つの行為の行きつく先としては，やはり成功が期待されるのが普通だからである。このコンテクストでは，成功は常に期待されるべきことではないと考える人間がいることも示したが，やはり一般的には成功が期待され，失敗は

望まれないのである。成功というポジティブなイメージがあるものに対して意見を述べるとき，わざわざアイロニー表現を使用して回りくどい言い回しをする必要はないであろう。アイロニーは，望ましくないことを何かしら暗示的に伝えたい気持ちがあるときに使用されるものであって，成功，天才など一般的に望ましい，肯定的なものとして捉えられるものは直接的に伝えるのが人間の行動として自然というものであろう。

この章では，実際にアイロニー発話を分析し，アイロニーの特性と効果について議論してきた。アイロニーは，ある発話や思考，信念，文，命題などをエコーしそれに対して批判的，または嘲笑的態度を伝える発話である。直前の先行発話などを反証している場合，つまり話し手と聞き手にとってエコーの帰属先が明らかであり，帰属する発話が特定できるときは，そのアイロニー発話に埋め込まれた低次表示は，伝達的表示である。一方，それに対して，ある漠然とした不特定第三者の思考をエコーした場合，その低次表示は心的表示である。これは，「こういった考えをする人がいるかもしれない」という，「心の存在」を知るものに限られる発話であり，伝達的表示を含むアイロニーより高度な発話であると考えられる。また，諺や格言などを引用したアイロニーは，その低次表示が抽象的表示であると考えられる。さらに，ある人が使った諺を皮肉って使用した場合，その発話の低次表示は，諺を引用しているので抽象的表示であるが，同時に，ある特定の人の発話をエコーしているので伝達的表示である（3-2 参照）。しかし，アイロニー発話はその帰属先が明確に特定される必要はない。エコーする発話から自らを切り離そうとする態度こそがアイロニーの特性なのである。

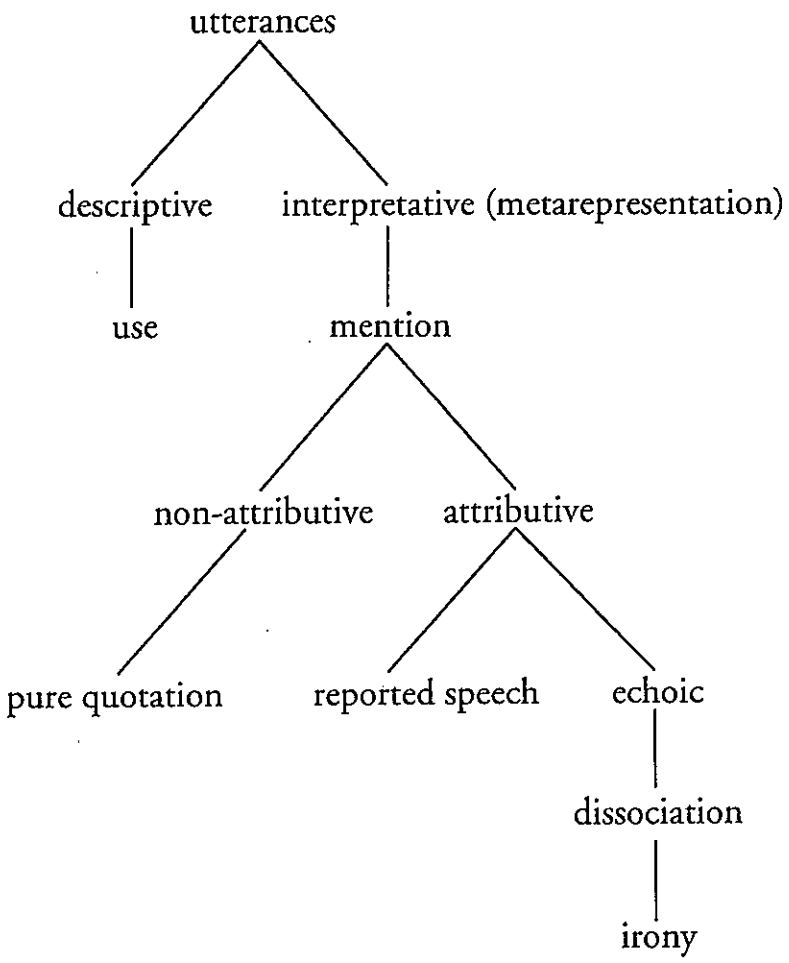
多くの場合，話し手は聞き手にその発話がいかに解釈されるかについて何らかの指示を聞き手に与えているものである。肉声の談話では，アイロニーの発話者は声の調子や顔の表情，あるいは身振りなどを駆使してそれがアイロニーであることを明示的にしようとする。一方，書きことばの場合，アイロニーの明示的なマーカーが伴わないことが少なくないため，書き手は読み手に頼るしかない。ここに文学作品の，受け手（読み手）によ

る鑑賞の違いが生まれるのである。弱い推意群が広く並んで，関連性が達成されている発話の効果は，詩的効果 (poetic effect) と呼んでいいものである。アイロニー発話も詩的効果を達成するものと考えていいだろう。日常的に使われる文彩的発話を詩と呼びたくないと思うかもしれないが，不確定性，つまり解釈の多面性という特徴は，アイロニーに限らず全ての発話につきものである。しかしながら，アイロニーほど聞き手に解釈の仕方を委ねる発話というのも，そう多くはないであろう。

第5章　結論

本稿は，(51) で図示されるように，発話を記述的とメタ表示とに区別し，後者に当たるアイロニー発話について考察してきた。

(51)



メタ表示とは，ある表示に別の表示を与えるものである。関連性理論では，アイロニー発話を，その発話自体がある発話や，思考，命題などをエコーしたものだと考え，エコーしたものを低次表示として全く別の表示を聞き手に提示する表現法だと考える。すなわち，アイロニーを，文字通りの意味に対して批判的，嘲笑的態度を表す発話であると考えることで，オリジナルである低次表示に新たな表示が与えられたと考えられるのである。しかしながら，エコーした発話が必ずしも特定化される必要は無い。オリジナルの低次表示は，実際に発せられたものであっても，発話者によって作り出された発話であっても構わない。エコーした発話や思考に一度帰属し，それから自らを切り離すことがアイロニーの特徴なのである。エコー発話というのは，ある発話や思考を引用し，それに対してある態度を抱いているとするものであるが，アイロニーは批判的，嘲笑的態度を聞き手に伝える発話である。この態度こそが話し手が聞き手に伝達するべく意図したことであり，逆にこの批判的な態度が聞き手に伝わらないとアイロニーとして解釈されないのである。アイロニーは，このような暗示的側面が強い発話であるため，解釈において，聞き手に依存するところが大きい発話であると考えられるであろう。

また，アイロニーは決して文彩的な表現として，他の発話と区別されるような発話ではない。アイロニーが，伝統的にある特有の人しか使用のできない特別な表現であるかのように捉えられてしまったのは，その伝達の効率のよさから古くから文学などで多用されてきたからであろう。本稿は，アイロニーなど文彩的と呼ばれてきた表現があたかも発話産出において，または解釈において，何か特別な才能が要求されるかのように考えられてきた従来の考え方に対して批判的見解を述べてきたものである。アイロニーの発話解釈は，他の発話と同様，日常的発話の延長線上に，分け隔てなく，一様に説明されるものである。

なぜ人はアイロニーを使用するのであろうか。4章において，アイロニーが社会的関係を保つ機能があると述べたが，やはりアイロニーを使用できる環境というのはある程度制約されるように感じる。初対面の人に向かっ

て，「細い足ですね」などと皮肉的に言うことはまずはばかれるだろう。しかし，旧知の間柄であれば，太い足を目の前にして，親しみを込めて「細いおみ足ですこと」と言うのは可能であろう。触れてはいけないようなことを，敢えて口に出すことで，話し手と聞き手の関係はより深くなるかもしれないし，間接的に言うことで相手を思いやる気持ちが伝わるかもしれない。アイロニーのようないわゆるレトリックな表現というのは，言外の意味が幅広く，聞き手の解釈に大きく依存するものなのである。

アイロニー発話を考察することによって，話し手は何を明示的にし，何を非明示的に残すかの決定をしなければならないこと，言い換えれば，あらゆる話し手は，自分の発話の形式を使って，聞き手の解釈過程の道案内をどの程度すべきかについて決定しなければならないことが示された。これが発話の文体と呼ばれるもので，文学的スタイルと日常的発話は区別されるべきものではないのである。文学的発話によって得られた効果が特別であることは否定しないが，同時に，どの程度伝達に携わっているかという観点から見れば，作家も他の伝達者も変わりはない。作家も文学的発話をすることで，最適関連性の見込みを引き起こしたとみなされ，読み手は処理労力が認知効果によって報われると期待するわけである。文学的発話が，日常的伝達と区別されるのは，作家が解釈過程で，読み手の責任がより多くなるよう仕向けるからである。そして，その読み手の余分な労力は，幅広い弱い推意群を解釈することによって報われ，これこそが読み手が探るよう求められていることなのである。アイロニー表現のさまざまな側面を考察することによって，人間のことばによる伝達行為がありふれていて日常的であるとはいえ，興味深くないことでは決してないということが示されたと思う。

＊本稿は，2002年度，神奈川大学大学院修士論文として提出した「アイロニー表現とエコー発話」を一部改訂，加筆したものである。また，本論文，及び修士論文の執筆にあたり，武内道子教授には大変なご鞭撻，励ましをいただき感謝の言葉もありません。

注

1) アイロニーを日本語に訳す場合，最も一般的なものは「皮肉」であろう。しかし，上で挙げた "irony" の意味を考えたところ日本語でその意味に対応するのは「反語」だと考えられる。

2) ここで implicature という語に「推意」という訳をつけ，conversational implicature を「会話の含意」としたのは，発話解釈には推論が必要であるという前提で，Grice の考える implicature と関連性理論のそれとが多少異なることを示しており，以下本稿で「含意」という語を使用する場合は Grice の考えを示すときである。推意については，二章で詳述する。

3) 本稿では Grice の掲げた四つの公理のうち，アイロニーに直接的に関与する二つの公理だけを言及しているが，他の二つの公理，量の公理 (Maxim of quantity) と様態の公理 (Maxim of manner) とは，それぞれ「要求されている情報量の貢献をせよ」，「不明瞭な表現を避けよ」というものである。詳細については Grice (1989) を参照されたい。

4) 表意，表出命題，及び高次表意については 2-3 を参照されたい。

5) 第 2 章，及び第 3 章は，座間 (2002) と重複する部分がある。

6) Blakemore (1992) では，関連性を有する三つの方法を，談話連結語 (discourse connectives) を用いて説明している。つまり，談話連結語を三つに分類し，例えば，(7a)，(7b)，(7c) は，それぞれ，"so"，"after all"，"but" などの談話連結語によってもたらされる認知効果と一致するとしている。

7) アドホック概念構築とは，単語の意味の特定化作業である。メタファー表現，"He is a bulldozer" では，machinery という概念を捨てることで，単語の意味を緩め (loosening)，その場限りの意味が復元されることになる。あるいは，"I'm tired" の場合，何をするのに疲れているのか，つまり，tiredness の程度を特定化 (narrowing) して，発話の解釈が成り立つことになる。

8) 例えば，"To be frank, I'm tired" など話し手の態度を明示的に表明するための言語形式は存在するが，これらも表出命題の構築には関与しないものである。

9) 他人の発話や信念を伝える最も顕著な例である引用に関しては，座間 (2002) を参照されたい。

10) 使用と言及についての詳細は Sperber & Wilson (1981) を参照されたい。

11) 子どもを対象にアイロニー，メタファーを含めた文彩的発話を使用して，その解釈の研究が試みられている。メタファーは，4，5 歳の子どもで解釈可能であるとされているが，アイロニーは，9，10 歳にならないと解釈できないという報告がなされている。

12) 例えば，次のやりとりで，

A：僕の最近の小説読んでくれた？

B：僕は二流作家の書いたものは読まない主義でね。

A は，自分が二流の小説家であるという想定をもっていなかったであろうし，発話の後も信じていないであろう。それでもこれをコンテクストにとり入れて，B が自分の書いた小説を読んでいないという正しい解釈（B の意図した解釈）を復元するのである。

参照文献

Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances: An Introduction To Pragmatics.* Blackwell. 武内道子・山崎英一（共訳）. 1994.『ひとは発話をどう理解するか』ひつじ書房.

Carston, R. 2002. *Thoughts and utterances: The Pragmatics of Explicit Communication.* Blackwell.

Gibbs, R. 1994. *The Poetic of Mind.* Cambridge University Press.

Grice, H. P. 1975. Logic and Conversation. In Cole, P. & Morgan, J. (eds.), *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, 41-58. Academic Press.

Grice, H. P. 1989. *Studies in the way of words.* Harvard University Press.

Hamamoto, H. 1998. Irony from a cognitive perspective. In Carston,R. & S. Uchida (Eds.), *Relevance theory: Applications and implications*, 257-270. John Benjamins.

Levinson, S. 1983. *Pragmatics.* Cambridge University Press. 奥田夏子・安井稔（共訳）. 1990.『英語語用論』研究社出版.

野内良三. 1998.『レトリック辞典』. 国書刊行会.

Noh, E. -J. 2000. *Metarepresentation.* John Benjamins.

瀬戸賢一. 1998.『認識のレトリック』. 海鳴社.

Sperber, D. 2000. Metarepresentations in an evolutionary perspective. Sperber, D. (ed.) *Metarepresentation: A multidisciplinary perspective*, 117-37. Oxford University Press.

Sperber, D. & Wilson, D. 1986. Relevance: *Communication and Cognition*. (2nd edn., 1995) Blackwell. 内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子（共訳）. 1993 / 99.『関連性理論：伝達と認知』研究社出版.

Sperber, D. & Wilson, D. 1981. Irony and the use-mention distinction. In Cole, P. (ed.), *Radical Pragmatics*, 295-318. Academic press. Reprinted in Davis, S. (ed.) 1991. *Pragmatics*: A reader, 550-563. Oxford University Press.

Sperber, D. & Wilson, D. 1998. Irony and relevance: A reply to Seto, Hamamoto & Yamanashi. In Carston,R. & S. Uchida (Eds.), *Relevance theory: Applications and implications*, 283-293. John Benjamins.

武内 道子. 2002.「言語形式の明示性と表意」『英語青年』第 148 巻. 第 4 号. 240-241.（2002 年 7 月号. 36-37）.

Wilson, D. 1999. Metarepresentation in linguistic communication. *UCL Working Papers in Linguisic* 11, 127-61. Reprented in Sperber, D. (ed.) 2000. *Metarepresentation: A multidisciplinary perspective*, 411-448. Oxford University Press.

Wilson, D. & Sperber, D. 1981. On Grice' s theory of conversation. In P. Werth (ed.) *Convesation and discourse*, 155-178. Croom Helm.

Wilson, D. & Sperber, D. 1992. On verbal irony. *Lingua* 87, 53-76.

Wilson, D. & Sperber, D. 1993. Linguistic form and relevance. *Lingua* 90, 1-25.

座間 直樹. 2002.「メタ表示と伝達」『神奈川大学言語と文化論集』第 9 号. 71-97.